

日本放射線影響学会で市民公開講座



市民公開講座のオープニング

日本放射線影響学会第59回大会の行事のひとつとして、同学会と放影研が共催する市民公開講座を2016年10月26日午後6時30分から、広島市中区のJMSアステールプラザ中ホールで開催し、一般市民と学会の参加者合わせて120名余りの人が聴講しました。

今年は東京電力福島第一原子力発電所の事故から5年目を迎える節目の年として、「広島・長崎が5年目の福島に贈るメッセージ～被ばく者に寄り添っての健康見守りと科学調査の調和点～」をテーマに4名の講師がそ

れぞれの視点から講演を行いました。

司会進行は広島大学原爆放射線医科学研究所の稲葉俊哉教授と放影研事務局広報出版室の堀向玲子 室長補佐が務めました。

広島県原爆被害者団体協議会の坪井直 理事長は、爆心地から1.5kmの場所で被爆して地獄と化した市内をさまよって歩き御幸橋付近で死を覚悟したこと、小さな女の子を救おうとして「火の方へ逃げるなよっ!」と声を振り絞って叫んだことなど、当時の様子を熱く語りまし



司会を務めた稲葉教授（左上）、講演をする児玉首席研究員（右上）、甲斐教授（左下）、緑川教授（右下）



自身の被爆体験を語る坪井氏

た。被爆の実相をひとりでも多くの人に知ってもらいたい。そして地球上から核兵器をなくして平和な世界を実現したい、との熱い思いが会場の一人ひとりの胸に響いたことでしょう。

放影研の児玉和紀 主席研究員は、放影研が研究成果を広島・長崎の市民の皆さまや世界の人々にどのように還元してゆけばよいのかを模索し、「ホームページでの情報発信」や「地元連絡協議会の開催」、「オープンハウスや市民公開講座の開催」などの活動に力を入れていることを解説しました。

大分県立看護科学大学の甲斐倫明 教授は、放射線防護の体系を図表で分かりやすく説明し、広島・長崎で行われている健康影響調査の成果が放射線防護基準の基礎となっていることを講演しました。

福島県立医科大学の緑川早苗 教授は、福島原発事故後、子どもたちの「甲状腺がん発症」を恐れる母親たちのために甲状腺の検査を大規模に行いましたが、皮肉に



市民公開講座のリーフレット

もその結果が母親たちの不安を一層増幅させてしまった状況を分かりやすく話しました。

科学調査と健康見守りを両立させることの難しさをあらためて認識して、調査する側とされる側との間で誤解を生まないためにも、細やかなコミュニケーションが必要であることを痛感した次第です。